

海外便り

井村君江

(明星大学教授)

*イギリス 1月12日(土) 氷雨が海にけぶるコーンウォールに滞在中、TV Channel 4で、オスカー・ワイルドの伝記劇 *Saint Oscar* が、夜の10時より1時間半、放送された。*The Times* の見出しには “The Artistic Importance of Being Wilde: Stephen Rea” とあった。Terry Lagleton の作品で、ワイルドのロンドン社交界の花形時代から、挫折、裁判、入獄、出獄後のバリ凋落時代から死まで、母親 Speranza, Douglas, 出版社の Smithers, Queensbury 候、検事の Charles Jell らが登場し、Stephen Rea の女性的演技の弱々しいオスカーをめぐる、その多彩な人生を重点的に、象徴的に迎っていく。繋ぎの説明は、典型的アイリッシュ・ミュージック(フィドル、フルート、太鼓)とコーラスで、ワイルド特有のアフォリズムをちりばめ、イギリスのヴィクトリア時代の人々の偽善的言動を、ウィットに歌っていく、真面目に、時に辛辣に、最後にオスカーが裸で十字架にかかる姿は、『獄中記』のキリスト像でもあろうが、直接にはサン・セバスチャンの映像を重ねたようだ。オスカーをヴィクトリア朝時代の殉教者と考え、キャノニゼーションされるべきと主張したいらしい。アイルランドのロンドンデリーからイギリスのハムステッド劇場まで、文字どおりロングランで評判がよかった。この珍しい自国側からのオスカー弁護、イギリス諷刺を謳うアイリッシュ劇団を、いつか日本に呼びたいものと思っている。

*イギリス 3月14, 20, 23, 25, 28: 4月5, 11, 13, 15, 16, 19日 ロンドン、コリジウム Richard Strauss のオペラ *Salome* (English National Opera) 指揮は Richard Armstrong, 演出は Joachim Herz。タイトル・ロールはアメリカのソプラノ歌手 Kuristine Ciesinski であった。*The Guardian* が、“A stunning theatrical success” と書いていたが、衣裳もセッティングも豪華、ヘロデの退廃的なオリエントの雰囲気を出していたが、なによりも Ciesinski のサロメは役作りに懲り、自分でデザインした腕も体の線もあらわな flesh coloured leotard の真紅のドレスがなまめかしい。七つのヴェールの踊りも、自分の教師に振り付けを頼んだという熱心さ。「イスラエルの砂漠にいれば、暑さと若さから、当然のこと、ドレスなんて着ず、裸に近いでしょうし、歩きかたもきつと猫みたいだったでしょうね」と解釈する彼女は、顔、姿、声、演技とオペラ・シンガーの

条件を備えてもち、しかも夫はおなじ歌手の Norman Beiley であるので、近頃印象ぶかいサロメの舞台であったが、spoilt child としての欲望をかなり強制し、そのためヘロデ王までも誘惑しかけるのは、over erotic な王女であったように思われた。

*アメリカ 4月25日 ロスアンゼルスで一週間、*Shakespeare Matrix* が世界から16ヶ国の招待で開催され、日本代表ということでシェイクスピアの誕生日に “Shakespeare in Japan” を話し終えた翌日、念願の William Andrew Clark Memorial Library を、Huntington Library の次に訪れた。オスカー・ワイルドの文献コレクションは世界で一番の図書館である。もちろんオックスフォードよりも、ダブリンのトリニティ・カレッジよりも。Typescripts, holograph letters は全部で3000ほど所蔵されている。Richard Ellmann もここに通ったのだが、体の不調もあったからであろう、伝記の決定版として日本で騒がれたワイルドの著書は、惜しいことに間違いが多いようである。Reference section の head である Michael Halls 博士と大変興味ぶかい話し合いが、一時間ほどでき収穫が多かった。しかし目的としていたいくつかのうち、パリのオテル・ド・キャブシーヌのレター・パッドに書かれたサロメの草稿は、残念ながら見付からなかった。もう一ヶ所、すばらしい個人のコレクションがアメリカにあって、そこに秘蔵されているらしいのだが、名前は秘密なのである。日本に帰ってみると、机に待っていた手紙の束のなかに、これまたロンドンのワイルド・コレクターからの手紙があり、ワイルドについて書き始めているとのこと、出き上がりが楽しみである。

*イギリス 4月29日付の *The Times* は、オックスフォードに新名所ができることを報じている。それは Old Parsonage Hotel が来月6月にオープンするのだが、これがワイルドと関係があり、所有者の Maichael Thompson がこの Wildean connection を客寄せに使うつもりなのである。1870年のころ、当時モダレン・カレッジのアンダーグラジュエイトの学生だったワイルドは約一年のあいだ、この創立300年のホテルに ladies of dubious reputation としばしば滞在し、女性が自分の性に合わないことを発見したというのである。学者の Martin Seymour-Smith は友達だった息子の Vyvyan Holland に、生前このことを確認したとのこと。経営者 Thomson 氏は “We expect a lot of interest from his devotees.” と言っているが、海外からのワイルドの devotees が、このホテルにどんな魅力と意味を感じるか、その内の一人として、この秋にでも行ってみたいと思っている。その前に、ロンドンでのワイルドの定宿 Savoy で一休みして、オフィスの Elizabeth とアフタヌーン・ティーを飲みながらおしゃべりし、去年焼けてやっと新装オープンした Savoy 劇場を見て、食事でもしてから出掛けるのがいいようだ。

(Tokyo, May 3, 1991)